

國學院大學學術情報リポジトリ

オトタチバナヒメ伝承

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 入江, 英弥, Irie, Hideya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002484

本書は、「オトタチバナヒメ伝承」に関して、文学と民俗学の両面から考察し、その全体を把握することを目的とした。対象とする資料は、総体として捉えるために、記載文芸や口承文芸といったジャンルにこだわらずに取り上げた。

現在、オトタチバナヒメ伝説が東京湾沿岸部を中心に一定の範囲に見られる。これは、『古事記』『日本書紀』の弟橘媛入水譚やそれに基づく話の影響によると考えられる。そのため、記紀に見られる媛の話の把握が必要となる。そこで、第一部において伝説の捉え方について探った上で、第二部において古代、および中世の文献に見られる弟橘媛入水譚を取り上げた。それから、第三部においてオトタチバナヒメ伝説を考察した。

考察に際しては、オトタチバナヒメの話がいかに後代に受け入れられたかといった「話の受容」を問題にした。話をそのまま受け入れるのか。それとも、話の形式は引き継ぎながら、時代に合った内容に変えて受け入れるのか。また、オトタチバナヒメ伝説が海辺の地域においていかに生じるかといった「話の生成」を問題にした。漂着物を得て生活する中、ヒメの話が伝えられて、人々が共感したことからその漂着物をヒメの物だと理解して伝説が生まれるのか。漂着物や漂着神を祀っていた神社が、ヒメの話の影響によってヒメゆかりの神社となり、そうした中で伝説が生じるのか。それらの点を視点に据えた。

なお、人物名の表記は、出典に基づいた。オトタチバナヒメについては、総称として用いる場合は「弟橘媛」と記した。

第一部「伝説をいかに捉えるか」では、伝説の捉え方を課題にあげた。

柳田国男と折口信夫の伝説に関する研究から学ぼうとした。両氏とともに「伝説は変化する」と捉える。その原因を、柳田はおもに時代ごとの社会事情に、折口はその時代にはやった文芸に求めた。伝説は動態的なものとして捉える必要があるということである。また、折口が指摘するように、伝説は文芸ばかりではなく、その時代に流行した絵画や演劇などの影響を受ける。そのため、関連資料はすべて集めて総合的に把握する必要がある。本書では、こうした捉え方に学んでオトタチバナヒメ伝説を把握しようとした。

第一章「柳田国男の伝説研究」では、柳田国男の伝説研究を取り上げて、柳田がいかに伝説研究に取り組んだかを考察した。

柳田の伝説研究は、大きくみて前期と後期とに分けて捉えることができる。前期では、さ

まざまに存在する伝説の分類を行った。後期では、神話や昔話との関係から伝説を位置づけようとした。『木思石語』においては、神話を母胎にして、そこから昔話や伝説が分化したと捉えている。のちに『口承文芸史考』においては、神話と併行して昔話や伝説が存在する場合があることに言及する。

柳田は、「伝説は神話を母胎にする」という理解の基に、伝説から神話を探り、その上で古代の人々のものの見方を明らかにしようとした。だが、伝説は変化してしまふ。それは、時代時代の社会事情によると考えた。柳田の伝説に関わる著作において、時代の社会事情について多くの紙数が割かれているのはそのためであることを指摘した。

そのほか、柳田の伝説研究から、伝説の定義づけを試みた。

伝説とは、人の立場から語られる個人や共同体を存立させるための物と結びついた言い伝えであり、過去の人々の世界観を認めようとする心の働きに支えられているとした。

第二章「折口信夫の伝説研究」では、折口信夫の伝説研究を取り上げて、折口が柳田の影響を受けながら、いかに伝説研究に取り組んだかを明らかにした。折口は、伝説は「流動性豊かな」ものと捉え、変化に注目する。

論考「愛護若」では、享保十九年（一七三四）の『近江輿地志略』に収められた愛護若伝説を取り上げ、関連する資料との比較を試みる。その結果、この話は、近江において江戸時代初期に成立した。形成過程としては、まず「貴人流離譚」が当地にもたらされ、それが稚児ヶ淵伝説と結びつく。それに地元の祭りである日吉山王祭りの由緒が取り込まれる。さらに、当時流行していた継子虐待物語、稚児物語、本地物語、そして殉死物語に影響を受ける。これらによって一つの伝説に固まったとする。

このように文学史的知識を基に話を構成する要素を位置づける。時代ごとにはやりの文芸があり、その結果、さまざまな要素を持ったと推察していることを指摘した。

第二部「弟橘媛入水譚を考える」では、今日のオトタチバナヒメ伝説の基になった「弟橘媛入水譚」の考察を課題とした。

第一章において『古事記』弟橘比売命入水譚に関する先行研究をまとめた上で、さまざまな角度からこの入水譚を捉えようとした。第二章では、「走水の海」という「場所」の問題から捉え、異なる世界に由来する女性が巡行する男性を守護し、役割を終えると元の世界に戻るという話の形式が基盤になっていることを指摘した。第三章では、「海難説話」の面から捉え直し、この話が「主人公が道中で海難に遭遇する」「同行者が助言する」「その通りに

すると危難を克服することができる」という要素からなる形式が基盤になっていることを明らかにした。このように当段は複数の話の形式により成り立っていることが指摘できる。一般に、一つの話に一つの話の形式が対応するといったように捉えがちである。本書では、話が複数の話の形式から成り立っている場合があることを前提にして、さまざまな視点から探究を試みた。

第四章では、『常陸国風土記』に見える「倭武天皇」と「大橘比売命」の話を取り上げて、古代における話の受容と展開の問題を考えた。第五章では、『神明鏡』の日本武尊水難の話に焦点をあてて、中世における話の受容の問題を論じた。

第一章『古事記』弟橘比売命入水譚研究史」では、『古事記』弟橘比売命入水譚を対象にした研究を取り上げて分類し、①話の背景に関する研究、②話の内容に関する研究、③話の形成に関する研究に大別できることを指摘した。これにより、この話がいかに捉えられてきたかを明らかにした。

話の背景に関する研究では、弟橘比売命の性格に関する考察がある。吉井巖氏は、天皇の命令に従うために倭建命の代わりに入水することが必要だと自覚し、意志を持って主体的に死を選んだ女性だと説いた。

話の内容に関する研究では、弟橘比売命の「さねさし」歌に焦点をあてた考察がある。青木生子氏は、この歌が夫への愛と感謝をうたったと読み取れることから、「夫への献身」を主題にすると説いている。一方、弟橘比売命の発話に焦点をあてた考察では、本段は「天皇の命令の絶対性」を主題にするという。

こういった論を踏まえて、当段を考察することにした。

第二章『古事記』弟橘比売命入水譚1」では、『古事記』弟橘比売命入水譚を対象にして、物語の舞台となった「走水の海」に焦点をあて、歴史的側面、自然環境的側面、そして信仰的側面に分けて話の意味を追究した。さらに、この話の形成過程について論じた。

自然環境的側面においては、「走水の海」は外湾と接する内湾開口部に位置することから、潮流が激しく、海難がたびたび生じたと推察され、それは朝廷の支配を揺るがす出来事として受け止められたはずである。これを背景にして、倭建命が妻の犠牲によってこの海を静めたと語って、朝廷の支配が揺るぎないものとなったことを示そうとしたと捉えた。

信仰的側面においては、「渡の神への投供」という習俗を背景にして、この海を支配する神に妻を手向けて、この海域の安全を手に入れたことをものがたろうとしたと捉えた。

また、この話の形成としては、朝廷の東国支配にとって重要な「走水の海」が船の難所と

なっていたことから注目される。そして、この世とは異なる世界に由来する女性が巡行する男性を守護して、その役割を終えたと元の世界に戻るといふ話の形式が基盤となって、当段の原形が形成されたと推察した。

第三章『古事記』弟橘比売命入水譚²では、この話の意味と特徴について、「海難説話」の典型例との比較を通して新たに捉え直した。加えて、編者の意図を探った。

当段は、海難説話の流れの中で特異な例といえる。多くは入水という行為は入水させられる人物の受動的行為として語られるが、ここでは入水が登場人物の主体的行為として語られている。これは、弟橘比売命の側に視点を据えて物語を展開させようとしたことによると考えられる。女性の愛と援助なしには東征が成し遂げられなかったことを示そうとしたことと、主人公の妻としての役割を果たすところに焦点をあてようとしたことからと推察した。

内容としては、当段は、編者によって前段の野火の難の場面と一組になっているものとして企図されていることが窺える。前段では、倭建命が叔母の援助と自らの知恵によって野火の難を克服し、当段では、妻である弟橘比売命の知恵と献身によって海難を克服したとみられる。要は、皇子夫婦の力によって東国の野と海とが秩序立てられ、それにより皇化が東国全体に及び、領有が確定したことを示そうとしたと結論づけた。

第四章『常陸国風土記』の倭武天皇と大橘比売命伝承³では、『常陸国風土記』行方郡相鹿・大生里条の「倭武天皇」と「大橘比売命」が「安布賀の邑」で出会う話を取り上げた。大橘比売命は弟橘比売命との関わりが説かれてきたが、記紀の話の中心をなす入水譚の要素が『常陸国風土記』に見あたらぬ。記紀とは別個に展開した伝承だと考えられる。

内容としては、既知の者同士が再会を求めたところ、この地でかなったと読み取れ、それを記念してこのような邂逅の話が伝えられることになった。話の機能としては、皇化を受け入れた地であることを表明し、当地が大和と直接結びついた地であることを示そうとした。話の形成過程としては、常陸国において倭武天皇の巡行伝承が育まれる中、夫婦神の巡行伝承を基にして、倭武天皇と皇后のめぐりあいの話ができた。后に関しては、倭武天皇の後として「橘」を名に持つ女性がふさわしいと考えられたことから「大橘比売命」となると推察した。

第五章「中世における日本武尊水難の話」では、中世の史書『神明鏡』の日本武尊水難の話を取り上げて、類話との比較を通してこの話の形成について考察した。

この水難の話の前には火難の話が置かれ、内容は記紀の話と同様である。一方、水難の話

では、海難説話の形式を取るものの、記紀の話と比べると、なぜ「橘姫」が海に身を投げたかといった入水理由をめぐって大きな違いが認められる。『日本書紀』では日本武尊が高言し、それが海神の怒りを買ったことからするのに対して、『神明鏡』では龍王が船中の美人を慕って求めたからとする。また、現代の伝説では、船に不浄な人が乗って海神の怒りを買ったためだとする。それぞれの時代において波が荒れた理由が考えられた結果、このような違いになったとみられる。よって、海難説話の形式を基にして、時代に合うようにその時代の思考や素材を取り込んだ結果、記紀の話とは骨格は同じでも、内容に差異が生じたと推察した。

話の受容の問題から言うと、後代においては、話をそのまま受け入れる場合と、骨格ともいべき話の形式を基にして、時代に合うようにその時代の衣をまとわせた内容に変化させて受け入れる場合とがあることを指摘した。

第三部「オトタチバナヒメ伝説を考える」では、オトタチバナヒメ伝説の考察を課題とした。話の受容、話の形成、および現状の把握といった課題をもって探究を試みた。

第一章と第二章では、伝説の分類と分布を扱って全体を把握しようとした。第三章では、伝説の諸相として祭りの起源伝説を取り上げた。第四章では、伝説の担い手について考察した。第五章と第六章では、当伝説がいかに伝えられているか、その実態を明らかにした。

第一章「オトタチバナヒメ伝説の分類」では、各地に伝えられたオトタチバナヒメ伝説を取り上げて、内容によって分類し、あわせてその伝承内容を考察した。

漂着物を基準にすると、当伝説は大きくみて、ヒメの遺骸が流れ着いたので祀ったとする「遺骸漂着伝承」、櫛や衣、袖、布などヒメゆかりの物が流れ着いたので祀ったとする「遺物漂着伝承」、「その他」に分類できる。

「遺骸漂着伝承」に関しては、海に身を投げたヒメの行為は海上に安全をもたらすためだと理解されて、こうした伝承が語られてきたと考えられる。内容から、「水難者供養」、および「海上安全祈願」といった信仰を基に形成される場合と、「うつぼ舟伝承」といった文芸に基づいて形成される場合とがあることを明らかにした。『古事記』では、櫛が海辺に寄ったとは記すものの、遺骸については触れない。よって、『古事記』の話をそのまま伝えていくわけではないことを指摘した。

「遺物漂着伝承」に関しては、とくに櫛や袖といった女性を象徴する物が流れ寄ったとき、これは女性水難者や女神を祀ったことを意味すると考えられる。内容から、女性を象徴する遺物が漂着し、弟橘媛入水譚の影響によってオトタチバナヒメの物だと認められて形

成される場合と、漂着物が女神の依代として祀られ、後代、その女神がオトタチバナヒメだと説かれて形成される場合とがあることを明らかにした。

第二章「オトタチバナヒメ伝説の分布」では、オトタチバナヒメ伝説を取り上げて、分布域がいかに関成されたのか、そして、伝説を受容する際の民俗的基盤は何かを明らかにした。伝承地は、東京湾沿岸部を中心にして海岸部に点在し、全国的に分布する伝説ではなく、地域を限定する伝説だと言える。

海辺の地域においては、漂着物を得て暮らすといった海辺の民俗を基盤にしながら、記紀の話の広まりを契機にして生じたと思われる場合や、漂着物や漂着神を祀る神社が、オトタチバナヒメの話の流行により、ヒメゆかりの神社となり、そうした中でオトタチバナヒメ伝説が生成したと考えられる場合も認められる。このようにして各地に伝説が生まれ、人々の交流によつて維持されながら、今日見るような分布域が形成されたと結論づけた。

そして、各地で受容される際の民俗的基盤とは、水難者を供養するという海辺の民俗や、海のかなたから寄り来る神霊への信仰、すなわち、漂着神信仰であることを明らかにした。

第三章「オトタチバナヒメ伝説と祭り」では、千葉県富津市西大和田のオトタチバナヒメを祀る吾妻神社の祭りを取り上げて、祭りとその起源伝説の関係について考察した。

社伝によれば、「ヒメの櫛が流れ着いたので岩瀬地区の人たちが馬に乘せて吾妻山にもたらし、て祀ったことが当社の始まりであり、神馬神事の起源である」という。この祭りは、ケガレの除去と海難者への供養が中心にあると考えられ、こうした祭りの起源伝説に沿って行われているわけではない。祭りと伝説が別個に形成され、あとから結びついた結果、このようなあり方になったと考えられる。神馬が渡御して祭場において競い合いをさせる「馬だし祭り」は当地方に類型的に見られ、その形式が当地に導入されて今日のような祭りが成立した。一方、伝説は、記紀の弟橘媛の話の影響から当地にヒメゆかりの櫛が流れ着いたとされて成立したとみられる。祭りが形成されて、その起源について説明が求められた際に、当社の起源伝説が利用されたと推察した。

第四章「船大工が伝えるオトタチバナヒメ」では、伝説の担い手の側から考察した。埼玉県寄居町末野の船大工が行った「船下ろし儀礼」を取り上げて、この儀礼の位置づけを行った上で、なぜ人形を流す儀礼が行われ、それがオトタチバナヒメだと伝えるようになったかを解き明かした。

人形を流す儀礼については、船の完成にあたって、船の安全を願って祓えの意味から船下ろしの最後に船上より折った竹棹とともに、ひとがたである人形を水に流すようになった

と推察した。要は、船の安全を祈願して、災厄を祓うことを念入りに行うためだったと考えられる。おそらく、儀礼が整った後にオトタチバナヒメと関係づけられたとみられる。

ヒメの名が持ち出されたのは、ヒメの船と乗客の命を救ったという行為が、船の安全を第一に求めた船大工によって高く評価されたことから考えられる。この背景に、戦前の国定国語教科書にヒメの話が取り上げられていて、その知識があつたことを明らかにした。

第五章「神奈川県横須賀市走水のヤマトタケルとオトタチバナヒメ伝説」では、神奈川県横須賀市走水における調査に基づいて、ヤマトタケルとオトタチバナヒメ伝説がいかに関係しているか、その実態を明らかにした。

オトタチバナヒメに関する話としては、入水にまつわる話が伝えられている。「海が時化たのは女性が船に乗ったからだ」とされて、「それでヒメは海に飛び込んだ」という。この話の背景には、「女性が船に乗ると海が荒れる」とする漁民の考え方がある。漁民の信仰に基づいてオトタチバナヒメの話が解釈された結果、このように伝えられたと結論づけた。

また、「岸边近くのムグリノハナと呼ばれる岩礁あたりで海に身を投げた」という。ムグリは「潜り」のことだと解釈され、そのためヒメがここで海に潜ったのだと受け止められるようになったと考えられる。この話の背景には、この岩礁近くを通る東京湾を出入りする激しい潮流の存在があげられる。船の航行がこの潮流によって阻まれたと理解されて、ここを入水の地だと言うようになったと推察した。

第六章「オトタチバナヒメを祀る神社の伝承」では、東京都に鎮座するオトタチバナヒメを祀る神社を取り上げて、ヒメに関わる伝承を実地調査によって報告した。あわせて神奈川県・千葉県のヒメを祀る神社、および関係社を一覧にして掲げた。

オトタチバナヒメを祭神としていたことが契機となつて、ヒメの話を踏まえた「櫛塚」が設けられ、祭典まで行われるようになった例が見られる。それは、目黒区下目黒に鎮座する大鳥神社の例で、美容業界の人たちが美容に携わる人にとってなくてはならない道具である櫛を祀るためだった。現代において、オトタチバナヒメの話によって新たな民俗が生み出される場合があることを指摘した。

以上、現地調査と文献に基づいてオトタチバナヒメ伝承を把握した。